

びふりおてか



同志社大学図書館報 №38 1985. 10. 15

図書館開眼のことなど

人文科学研究所所長 門 脇 彰

こんにちのいわゆる高度情報化社会のもとで図書館のあり方や果たすべき役割についても、大きく問い直されているようである。だが、人々の図書館へのかかわり方は

多様であるし、また当然のことながら、各人の体験の違いによって図書館に対するイメージもさまざまであろう。今後は発達する情報技術に対応して図書館の変貌が促されることが不可避的であるにせよ、それに振り回されることなく、優れた情報技術を使いこなしながら、利用者のニーズを中心にすえて図書館の個性化を計る方向が求められるのではないだろうか。

大学図書館の存在が私にとって身近に感じられるようになったのは3年生のころ、それも後期だったように記憶するので、大学生の図書館開眼としてはやや遅いほうに属するといふべきかもしれない。その頃ある友人が私の知らない某教授が学生に語った言葉として、次のような話をしてくれた。すなわち、授業中などに色々な教授がそれぞれ参考文献を指示するであろう。それらをすべて読みこなすなどということは、学生にとって多分不可能であろう。しかし、せめて一度は指示されたすべての参考文献を手にとって眺めてみる、という位のことでなら学生にもできるはずだしやっておきなさい、というのである。この話を聞いて当時の純真な一学生としては、真

目 次

図書館開眼のことなど.....	1
新キャンパス(田辺校舎)の図書館.....	3
婦人問題に関する二次文献.....	7
実例を中心とした	
資料のさがし方⑧.....	13
図書館利用状況推移.....	15
ピックアップ	
ティチングの	
『Illustrations of Japan』	18

理追究の姿勢としていささか邪道の感なきにしもあらずとか、本の装丁を研究しているわけでもあるまいにとか、若干の反発を禁じえなかった。だが、おそらく某教授としては、指示された参考文献について学生諸君がより一層強い関心をいだくよう促し、学生の足を図書館に向けさせようとする意図にもとづく発言だったのではないかと、と今になれば推察される。実際、私にとってこの言葉の効き目が間もなく現われることとなった。

3年次から参加した経済学部ゼミナールで M. Dobb, Soviet Economic Development Since 1917 を輪読することが決まり、後期に入ってテキストが到着した。500ページ近い大著をめくってみると欧文の文献が数多く引用されている。もちろん、ソ連経済にかんする研究書だからロシア語資料の利用は欠かせないわけだしロシア語の文献名もローマ字で出典を明示しているが、イギリスの有名なマルクス経済学者である著者は、読者を意識してのことであろうか、ロシア語文献の引用はむしろできるだけ抑え、欧米での研究成果の活用を脚注に表示するよう努力したふしがあった。そこで私としては、まだなじみの乏しかったロシア語は別にして、この書物の脚注にでてくる英独仏語の引用文献に対して上述の某教授の言葉を実践に移してみようと思い立ったわけである。

中央図書館ばかりではなく学部図書室へも通った。1950年代半ばに私が在籍していた国立大学では、学部図書室を学生が利用できた。貸出は許されなかったが、閲覧室を学部学生に開放する程度であれば、学生数も多くないので教官の研究活動に支障が生じることはほとんどないものと、おそらく考えられていたのであろう。カード目録で分類番号を調べ図書請求書を提出して、お目当ての洋書が次々と机上に現われた時には、感動にも似た喜びを覚えたことを、古い図書特有のカビ臭さとともに今でも新鮮な感じで想起することができる。高度成長期に先立つ私の学生時代には、一般市民にとって欧米はまことに遠い存在であり、また出版物があふれる昨今とは異なり図書とくに洋書は非常に貴重なものに思われていた。ある意味で「幸せな」時代の図書館開眼であったというべきなのかもしれない。

上述の某教授の言葉ではないが文字通り手にとって眺める程度で再び窓口に持参して返却する、という作業を繰り返した結果、Dobbの引用した欧文書の多くが大学図書館に所蔵されていることを知ったのは、まことに驚きであった。第2次世界大戦終了以前の日本において、ロシア十月革命後のソ連社会主義の研究などということは、長らく「国禁」とされていたはずである。それにもかかわらず、戦間期に欧米で刊行されたソ連の経済・政治・社会にかんする研究書が、出版の時点で図書館によって入手され、保管し続けられてきたことに対して、当

時の私は、さすが図書館とはスゴイところだな、と素直に感心した次第である。この時点で、図書館の所蔵能力への畏敬と信頼感を植え付けられたように思う。

その後大学院5年間を通じて大学図書館にはずいぶんお世話になった。入り浸りの感すらあったが、この間の図書館通いはどちらかというと、読書と思索のための相対的に快適な環境の活用という形をとっていた。それは1つには、皮肉なことに、私にとって驚異的にすら思えた図書館の収蔵能力が、専攻分野の関係で私が緊急に必要なようになるようになったロシア語文献までには、十分及んでいなかったせいであるが、それ以上に住宅事情のおかげで余儀なくされたという面が、大きく作用している。何分にも当時の学生下宿の悪条件は今とは比較にならないものであり、とりわけ冬期の暖房には苦勞させられた。もちろん、現在の本学図書館のような全館冷暖房など望むべくもなく、冬期の図書館内部は寒々としていたが、2～3の小閲覧室にはスチーム暖房がよく効いていたので、開館と同時にそこに座席を確保することが防寒対策として必要だった、というわけである。暖かすぎてよく居眠りしたのを覚えている。今でも机に向かうと睡魔におそわれるのは、その時身についた悪癖の名残かもしれない。

以上のように、「図書の貯蔵所」への信頼感から出発し相対的に快適な環境の活用へと傾斜した初期体験が、図書館に対する現在の私のイメージをも強く規定しているように思われる。とはいえ、かりに公開性を前提とする蔵書と環境とが図書館の基礎条件であるとしても、これら3条件をすべての図書館が完ぺきに備えるべきであるなどと主張するつもりは、毛頭ない。それとは反対に、これら3条件のそれぞれの強弱や組合せを工夫することによって、各図書館の個性的特色が発揮されることが望ましいし、むしろそのような図書館の個性化の方向のなかで利用者のニーズがより良く充足されるのではないかと、考えている。

ここで念頭においているのは、日本点字図書館（東京新宿区）をはじめ国内の2～3のユニークな図書館活動のことなのであるが、本学でも例えば人文科学研究所のように、共同研究テーマに則した系統的な資料収集が多年継続された結果、おのずと特色あるコレクションが形作られるに至った場合がみられる。今後さらに意識的に学内各図書館の個性化を進めるため、数年来の懸案である雑誌センター（仮称）構想の実現が望まれる。その創設によって、センター自体の独自性が発揮されると同時に、学部研究室などにとっても蔵書構成のより一層個人的な展開を計る契機が与えられるのではないかと、思われるからである。また、新設の田辺図書館に対しては、運営面でのさまざまな創意工夫を期待している。

新キャンパス（田辺校舎）の図書館

蔵書構成・利用案内（概要）

来年4月の田辺校舎開校を控え、新キャンパスの図書館の建築工事も順調に進み、建築面積2,590.34㎡、延べ床面積7,201.47㎡（1階2,571.39㎡、2階2,600.09㎡、3階2,029.99㎡）、建物の高さ（最高部）19.9mの地上3階、鉄骨鉄筋コンクリート造の姿をあらわしつつあります。

“学生の学習を主目的とした図書館”としての機能の一つの柱をなす「施設」については、本誌前号（No37）で“施設の概要”としてご紹介しました。今回は開校時までに変更される部分や未定の部分もありますが、施設とともに重要な柱である「所蔵資料（蔵書構成）」および「運用（利用案内）」についてその概要をご紹介いたします。

1. 図書資料の構成・配架

田辺校舎における講義に関連ある図書、課外活動、大学生に必要と思われる図書資料などを中心として構成します。参考図書は、前記に関連の深いものおよび文献探索に必要な基本的なツール類を備えますが、将来は今出川キャンパスの図書館（以下今出川館と称す）の参考図書と同程度の蔵書構成をめざすことになっています。収書に当っては、教員による推せんおよび1、2年次生の利用動向調査に基づいて進めています。開館当初の蔵書冊数は、約3万5,000冊になる見込ですが勉学には対応可能な冊数と考えられます。

また、高度な水準を持つ学術資料、使用頻度の低いと予想される資料などは、主として今出川館で収集、所蔵することになっています。

なお、学年にかかわらず今出川、田辺（以下田辺館と称す）の両図書館を自由に利用することができます。

◇資料の種類（形式・内容）・配架

①図書（和書）

単行書、叢書・講座・全集・個人全集・著作集、学内関係者の著作、学内機関の編集・発行によるもの、同志社関係資料などを三部門に分けて配架します。

人文科学部門——第1開架閲覧室（2階）

社会科学部門——第2開架閲覧室（3階）

自然科学部門——第3開架閲覧室（3階）

なお、美術書などの大型図書は、第1開架閲覧室新書・

文庫コーナー付近の壁面に集中配架します。

②図書（洋書）

前記①と同じタイプの基本書、Pelican booksおよびPenguin books——第1開架閲覧室洋書コーナー（2階）

③新書本・文庫本

新書（岩波・中公・講談社現代・
講談社ブルーバックス）
文庫（岩波・講談社学術・クセジュ・
中公・新潮・レグルスなど）

第1開架閲覧室
新書・文庫コー
ナー（2階）

④父兄会文庫

今出川館と同様「父兄会文庫」図書を備え付けます。

文学部父兄会文庫——第1開架閲覧室（2階）に併置
経済学部父兄会文庫——第2開架閲覧室（3階）に併置

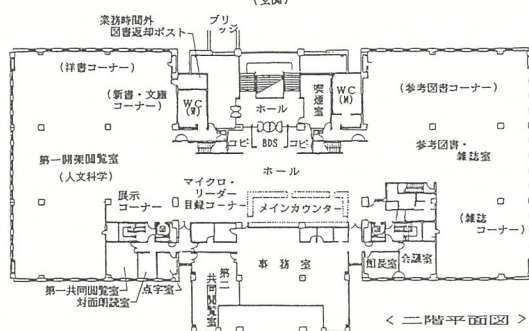
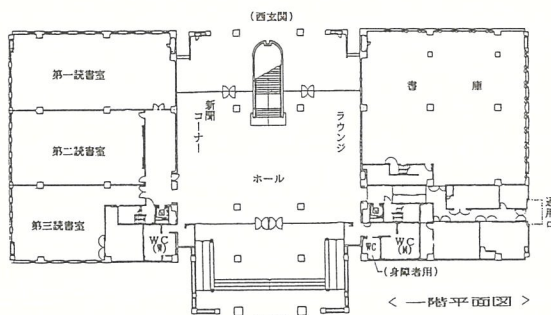
⑤参考図書

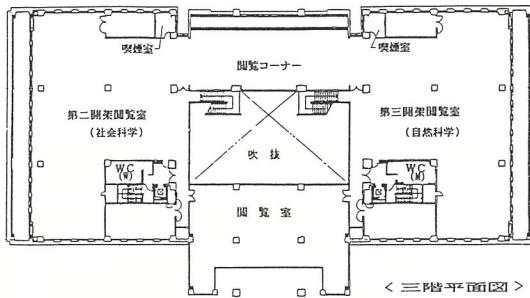
調査に必要な百科事典・専門事典・便覧・辞典・統計書・文献目録・地図帳など——参考図書・雑誌室参考図書コーナー（2階）

なお、主要各国語辞典は、3階閲覧室にも数冊ずつ備えます。

⑥雑誌

一般誌、学術誌、学内機関発行誌等を主として約300種配架展示します。タイトルによっては、バックナンバー





(既刊号)も揃えます。——参考図書・雑誌室雑誌コーナー (2階)

①新聞

全国紙 (朝日・日本経済・毎日・読売・
京都・サンケイ・日経産業)
英字紙 (Japan Times・
New York Times)
地方紙 (北海道・河北・東京・中日・
山陽・四国・西日本・沖縄)
その他 (日本読書新聞・週間読書人・
図書新聞・Student Times)

新聞コーナ
ー (1階)

なお、全国紙のうち数紙は、バックナンバー (縮刷版)
を参考図書・雑誌室 (2階) に配架します。

②マイクロ資料

雑誌、新聞等で現物によるバックナンバーの入手困難な場合は、マイクロ資料を必要に応じて受け入れる予定です。——マイクロリーダーコーナー (2階)

II. 図書資料の探し方

閲覧方式は、利用者が直接書架の資料を手にし、館内閲覧もしくは、館外貸出の手続をとる全面開架方式を採用します。

したがって、前項「図書資料の構成・配架」で示した資料の種類によって、求める資料・主題の配架されている閲覧室 (図書室) に行き、該当の分類個所を探します。書架にない場合や、どこにあるかわからない場合は、下記のような方法で調べて下さい。

◇田辺館所蔵資料

①開架閲覧室図書・参考図書——機械検索

1冊1冊についての必要なデータ (書名・著者・編者・訳者・出版者・出版年・ページ数・サイズ・請求記号・図書番号など) がコンピュータに入力されていますので、メインカウンター (レファレンス・ポジション) に設置されている目録検索用の漢字端末機を利用します。(漢字端末機は、蔵書冊数が増加した段階で

目録コーナーに数台設置予定です)

●著者名や書名が分っているとき——著者名 (編者等も含む) や書名 (叢書名を含む) のカタカナでキーをたたき、所蔵していればその著作に関する図書資料のデータが画面にディスプレイ (表示) されます。必要な資料の請求記号をメモして配架されている書架に行き利用します。

●特定分野・主題にどのような図書があるか調べるとき——

(i) 探したい分野の分類番号を分類表 (日本十進分類法 (NDC) 新訂 8版) で調べ、分類番号 (例: 代数学 → 411) をたたけばその分野の資料のデータが画面にディスプレイされます。

(ii) 主題・事柄・トピックスからでも検索できます。例えば「代数学」に関する場合、「ダイスウガク」とキーをたたけば、それに関する資料のデータがディスプレイされます。

②雑誌・新聞——雑誌・新聞所蔵リスト (仮称)

備付のリストにより所蔵巻号も調べることができます。

◇今出川館所蔵資料

田辺館では、別記のように勉学に必要な資料は一応所蔵していますが、もしない場合でも今出川館に所蔵している場合があります。そのような場合、レファレンス係員に質問していただくか、下記の目録により検索して下さい。

なお、目録に収録されているときは、直接今出川館に出向き現物を確認の上、利用することが望ましい訳ですが、出かけられない場合は所定の手続きにより利用することができます。この場合は、取り寄せに要する時間等により数日後になります。今出川館資料の複写 (後出「文献複写サービス」の項を参照) についても同じく申込により可能です。

〈図書〉

1964年4月～1978年3月 (受入分) ——「同志社大学蔵書目録」(冊子体)

1978年4月～1982年3月 (受入分) ——カード目録

1982年4月以降 (受入分) ——「同志社大学蔵書目録」(冊子体)

※1964年3月以前 (受入分) については、レファレンス係に質問して下さい。

〈雑誌・新聞等逐次刊行物〉

「同志社大学所蔵逐次刊行物総合目録」(冊子体) によ

り所蔵巻号，所蔵部館所が分ります。

※収録されていても研究室（所）に所蔵する資料や特殊な資料は利用できないことがあります。

Ⅲ．図書館の利用について

◇開館時間（開室時間）

開館時間については，授業時間割，サービス体制等との関連もありますので追って決定いたします。

なお，各フロアの開室時間（利用時間）は，1階の第1～3読書室と2・3階の第1～3開架閲覧室，参考図書・雑誌室等それぞれ機能・役割が異なりますので，曜日・時期によって時間差を設けたり延長する場合があります。

春・夏・冬期休暇中の開館時間（開室時間）についても上記同様未定です。

◇休館日

日曜日，祝祭日，他に大学の指定した日。

◇カウンター業務取扱時間

2階・3階のフロア開室時間に準じます。

◇入館時の携帯品

学生証は必ず携帯して入館して下さい。図書資料を配架している2階・3階各閲覧室へは2階出入口からになります。ここにはゲートがあります。これは電子工学を応用した図書無断持出防止装置で，ブック・ディテクション・システム（BDS）といいます。したがって，特別なものを除きカバン等の持物は自由に持ち込めます。閲覧機の天板下に携帯品棚を設けていますので利用して下さい。

◇利用上の注意事項

館内では，私語・談笑は慎んで他の利用者に迷惑をかけないように心がけて下さい。喫煙は，1階ラウンジ，2階・3階の喫煙室に限ります。また，図書館の建物，施設には一切の貼紙はできません。その他図書館の規則を厳守して快適に利用できるよう利用者の協力を期待します。

Ⅳ．図書資料の利用とその手続

◇館内閲覧

全館開架方式を採用していますので書架から何冊でも取り出せますが，同時に閲覧できる冊数は下記の通りとします。

開架閲覧室図書——3冊以内

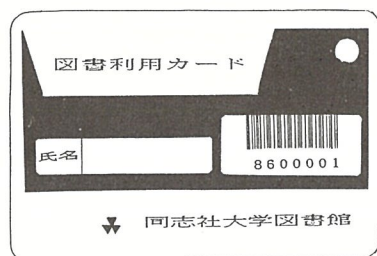
参 考 図 書——2冊以内

雑 誌——2冊以内

※利用後は，必ず元の位置に返して下さい。

◇館外貸出

手続の迅速化，簡素化を図るためコンピュータにより処理します。利用者のプライバシーの保護については十分配慮しています。



（見本）

●図書の館外貸出登録

入学当初（在学生は年度当初）に館外貸出登録をして「図書利用カード」の交付を受けます。入学後4年間有効ですので紛失しないよう大切に扱って下さい。

●貸出冊数および期間

開架閲覧室図書——3冊以内（当初）2週間以内

※冊数は，蔵書の増加，利用動向により最終的には4冊以内とする予定です。

参考図書，雑誌，その他特に指定する図書資料は館外貸出できません。



（見本）

●館外貸出の手続

「図書利用カード」と貸出希望図書をメインカウンター（2階）に提出。係員がバーコードリーダーに「図書利用カード」のバーコードナンバーを読み取らせ，次いで図書の「図書番号ラベル」のバーコードナンバーを読み取らせるだけで手続は完了となります。

したがって，貸出の都度，貸出者の所属学部，学年，氏名，請求記号等を記入することは一切必要としません。

（貸出・返却は，将来3階でもサブ・カウンターを設けて受付ける予定です。）

●館外貸出図書の返却

利用者は，返却図書をカウンターに提出し，係員がバーコードリーダーに「図書番号ラベル」を返却冊数分読み取らせるだけで手続は完了します。

返却受付時間は、原則としてカウンター業務取扱時間内としますが、止むを得ずその時間内に返却できないときは、2階入口前の壁面に設置の「返却図書ポスト」に入れて下さい。係員が翌日、返却手続の処理をします。

なお、他の利用者のために返却期日は厳守して下さい。万一、返却が遅れたときは、一定期間の貸出停止になります。

●館外貸出中の図書の予約および問い合わせ

他の利用者が借りている図書の予約および貸出者自身の貸出冊数・返却期日等の問い合わせにも対応できるようなシステムを準備中です。

V. レファレンス・サービス

開架閲覧室、参考図書・雑誌室などで求める内容、目的の資料にたどりつけない場合が考えられます。そのようなとき、カウンターの係員に質問していただければ、各種目録の使い方、必要な資料・情報を探し出す方法・手段などをアドバイスするレファレンス・サービスを行ないます。内容によっては、若干の時間、日数を要する場合がありますが、遠慮なく申し出て下さい。

VI. 文献複写サービス

学習、研究活動を援助するためにセルフ・サービスによるコイン投入式文献複写機を2階ホール両サイドに設置します。

コピーできる資料は、図書館に所蔵する図書・雑誌に限ります。

用紙のサイズはB4版、料金は今出川館（1枚20円）に準じます。

なお、今出川館所蔵図書資料の必要部分のコピーを希望する場合は、カウンターで受け付けます。受け取りまでの日数は、枚数にもよりますが2～3日要する予定です。

VII. その他のサービス

前出のレファレンスおよび文献複写を含む種々のサービス内容は、今出川館と基本的に同じです。

◇今出川所蔵資料の利用

「II. 図書資料の探し方——今出川館所蔵資料」の項を参照。

◇他大学図書館などの利用

テーマ、内容によっては田辺館所蔵資料だけでは充足できないことも考えられます。前項の今出川所蔵資料と

同様、他の大学図書館や研究機関の資料が利用できるように援助する場合があります。主なものとして、他館利用のための紹介状の発行や他館が所蔵している資料の複写依頼などが挙げられます。

◇購入希望図書の申込

教員による推せん、利用調査等に基づいた学習に必要と考えられる資料の収集、所蔵をはかっていますが、目的の資料がない場合もあります。是非図書館に備え付けてほしい図書、雑誌があれば「購入希望図書申込票」に記入して所定の箱（カウンター）に入れて下さい。特殊な資料を除き学術に関するものはできる限り希望に応じます。

◇催し物

「図書の利用の仕方」「雑誌の利用の仕方」などテーマ別に、スライドを併用して図書館を有効に利用していただくための説明会を適宜開く予定にしています。スクリーン、黒板、暗幕等が設備されている第2読書室（1階）を使用することになります。

また、展示コーナー（2階）では、利用者にお知らせしたい新刊（着）受入資料や珍しい資料などを適宜展示、紹介する予定です。

◇館報「びぶりおてか」

本誌も本号で38号となりました。学生と教職員、図書館員の相互間のコミュニケーションをはかるために、図書館のありのままの報告、紹介、PR、サービス等の窓として少くとも年2回（春・秋）発行しています。発行次第、ラウンジ（1階）およびカウンター（2階）のパンフレット架に置く予定です。

今後は、今出川館とともに、田辺館についての記事も増えますので、内容的により拡がったものになることでしょう。ご期待下さい。

ちなみに、「びぶりおてか」という名称は、ラテン語の“図書館”に由来しています。

以上、田辺校舎の図書館の概要について、前号に続き2回にわたってご紹介いたしました。来年4月の開校時から学習図書館としての機能が十分に発揮できるよう、また、快適に利用していただけるよう「施設」「所蔵資料」「利用」の各面にわたって万全の準備を進めています。ご理解とご協力をお願いする次第です。

婦人問題に関する二次文献

「国連婦人の10年」の最終年をむかえた今日、女性の地位への関心はいっそう高まり、各分野において「婦人問題」をテーマとする研究がすすみ、その成果にはみるべきものが、多く刊行されています。

そこで今回は本館所蔵の婦人問題に関する文献リストを紹介し、独立刊行の書誌、記事索引、図書の巻末や雑誌に掲載された文献リスト、年表などを中心に、その主なものを紹介しました。(書名は『 』で囲んだ)

〔書誌の書誌〕

1. 『婦人問題書誌の書誌』

長沢雅男ほか編 国立婦人教育会館 1981 P.43(参028.367; F)

1980年夏までに、わが国で刊行された婦人問題関係の書誌、図書や雑誌に収録されている文献リスト356点を10項目の主題に分類編成し、各文献ごとにその性格を示す内容摘記がある。また各項目の基本書誌と周辺領域を広く包括している。

2. 『主題書誌索引』

深井人詩編 日外アソシエーツ 1981 P.352(参028; F2)

1966年から1980年までに刊行された図書、雑誌に発表された、参考文献リスト・目録が収められている。「日本十進分類表」新訂8版に準拠して分類し、本文は分類見出し項目を50音順に配列。関連項目の中から必要な小項目を選んで活用するとよい。

〔記事索引〕

3. 『経済学文献季報』

経済資料協議会 同朋舎 1956～ 年3回(参P028; K)

広い意味での経済学と関連分野にわたって、雑誌論文・図書資料を幅広く収録。16分類中労働問題・社会問題に比較的多く婦人問題関係の文献が含まれている。

4. 『雑誌記事索引——人文・社会編——』累積索引版

日外アソシエーツ編・刊 1975～ 全60分冊(参P027; Z3)

第1期 (1970～1974) 11冊

第2期 (1965～1969) 11冊

第3期 (1955～1964) 11冊

第4期 (1948～1954) 11冊

第5期 (1975～1979) 16冊

1948年から1979年までの雑誌記事166万件を収録。社会編、労働編、教育編等の関連シリーズの中から必要項目をさがすとよい。主題の相関索引および著者名索引が各巻にある。1・2期と3・4期それぞれをまとめた、総合索引著者名編、同件名編もある。

5. 『婦人・家庭・生活に関する27年間の雑誌文献目録』

昭和23年～昭和49年 日外アソシエーツ編・刊 1983 P.299(参028.367; N)

前出『雑誌記事索引』第1期～第4期(1948～1974)をもとに、婦人・家庭・生活に関する文献目録として使い易いように再編成したもの。雑誌文献約12,500件を収録し、主題別の文献目録のほか、巻末に事項索引を付している。

6. 『政治・社会問題に関する雑誌文献目録』昭和23年～

昭和49年 日外アソシエーツ編・刊 2冊(参P028.31; N2)

前出『雑誌記事索引』第1期、第2期(1965～1974)、第3期、第4期(1948～1964)をもとに、政治・社会問題に関する文献目録として再編成したもの。

5、6にあげたほか、労働問題、賃金問題、社会政策それぞれの文献目録として再編成したものがある。

〔蔵書目録〕

7. 『婦人問題および同関連文献目録』

立命館大学図書館 1979 P.58(参028.367; R)

1979年3月までに受入た和文図書約670点の所蔵目録。戦後刊行されたものが主で、戦前に刊行されたものも若干含まれている。

8. 『国立婦人教育会館所蔵図書目録』第1編～第3編

国立婦人教育会館 1982～1983 3冊(参028.36; K2)

第1編 1977年(会館設立)から1981年3月までに受入整理した図書のうち、伝記・女性史、社会、教育、風俗習慣・民俗学、家政学・生活科学の分野のものを収録。

第2編 1977年から1981年3月までに受入整理した

図書で1編に収録された以外の分野の図書を収録。

第3編 1981年4月から1983年3月までに受入整理した図書を収録。

現在ひきつづいて資料編を作成中。これには雑誌および婦人・教育関係の政府機関、婦人関係施設・団体の刊行物を収録予定。

なお同会館には明治以降の図書、雑誌、新聞を含めて1984年3月現在34,991冊の蔵書がある。電話、文書による質問やコピーサービスにも応じてくれる。

9. 『お茶の水女子大学女性文化資料館文献・資料所蔵目録』 No.2 No.3 お茶の水女子大学女性文化資料館 1979, 1983 2冊 (参028.367; 02)

No.2 同館が1977年4月から1978年3月までに整理完了した図書、雑誌、資料を収録。洋書の資料の部ではアメリカ諸大学女性学講座資料がまとめて収録されている。

No.3 同館が1978年4月から1982年3月までに整理を完了したものを収録。この中の滝川コレクションは、滝川政次郎博士が収蔵されていた、日本を中心とする遊女関係資料である。洋書マイクロフィルム「女性史」1,248リールは、アメリカ合衆国の9つの女性史コレクションの主要資料を集大成したもので世界的にも著名なもので、概要が紹介されている。

〔婦人問題全般〕 農村婦人問題を含む

10. 『婦人問題文献目録 図書の部』

国立国会図書館 1980 2冊 (参028.367; K2)

同館所蔵のものを中心に、(I) 明治編は明治期の図書1,282タイトル、(II) 大正期・昭和戦前期編は大正期及び大太平洋戦争終結までの昭和期に刊行された図書4,243タイトルを収録。いずれも序文、目次を紹介し、資料の内容がわかるようにしてある。巻末に書名索引がある。なお本目録は全体を5分冊とし、ひきつづき図書の部「戦後期」、雑誌論文の部「戦前期」「戦後期」の3冊が刊行される予定。

11. 『日本女性研究基礎文献目録』

内野久美子編 学陽書房 1981 P.181(参028.367; U)

戦前から1980年までに刊行された、和文単行本レベルの日本女性に関する研究1500冊余を収録している。13の項目に大別し特に基礎的文献は、項目ごとの解説の中で内容を紹介している。

12. 『農村婦人問題文献目録』

井出ふさえ、永原和子編著 農業総合研究所 1952 P.70 (旧016.326; I)

1925年から1950年までの和文図書、小冊子、雑誌、年報、年鑑類に発表された論文892点を採録している。A. 目録、B. 解説および解題の二部からなっており、BにはAの中の主要な文献65点についての解題がある。広い範囲の資料を丹念に調査した詳細な目録であり、解題もしっかりしたもので、この種の目録として代表的なものである。

13. 婦人問題文献目録 日本近代女性史研究会作成

『明治文化全集』第16巻婦人問題編第2版 明治文化研究会 日本評論社 1968 P.405~412 (参210.6; M5) 所収

1871年から1912年までの和文図書266点を収録。国立上野図書館(現国立国会図書館)と大原社会問題研究所の蔵書には請求記号がついていて便利である。

14. 参考文献・基本資料『農村婦人』丸岡秀子、大島清編 亜紀書房 1969 P.393~396 (参367; G) 所収

1917年から1967年までの和文図書・資料55点。農業問題一般、農村社会、農村婦人問題、記録、基本資料にわけて収載している。

15. 戦後婦人問題に関する文献 塚本しゅう子『共同討議戦後婦人問題史』一番ヶ瀬康子編 ドメス出版 1971 P.332~338 (参367.21; I) 所収

戦後期の図書・雑誌145点。女性史一般、婦人労働、婦人教育、外国婦人論等各分野のものと、婦人組織の刊行物、婦人団体機関誌のミニコミ出版物を収載している。この他同じく巻末に、統計資料、戦後婦人問題年表(1945~1970)もある。

16. 主要参考文献資料『日本農村婦人問題』丸岡秀子 ドメス出版 1980 P.203~206 (参611.921; M3) 所収

初版は1937年に出版されているので、ほとんどが戦前の資料。内務省、農林省、内閣統計局等の政府刊行物、調査研究機関の調査報告書など45点を収載している。

17. 婦人に関する文献目録(1)(2)『国立国会図書館月報』 国立国会図書館 54号1965年9月(P.28~29)、57号

1965年12月（P.18～21）（㊦P016；K3）所収

婦人問題，婦人労働，農村婦人，女性史，婦人運動，民俗関係等の戦後に刊行された和文図書172点を収録している。参考室に本報に掲載された文献目録をコピーして製本したものもある。

なお同月報の12月号には年間総目次があるほか、『国立国会図書館月報1961～1977（1～201号）総索引』1978がある。社会問題，社会保障，労働など関連分野の書誌の項を調べるとよい。

18. 婦人問題にかんする文献目録の紹介 森崎富喜『参考書誌研究』10号 1974年11月P37～46（㊦P020.1；S2）所収

主として戦後に刊行された和文図書，雑誌に掲載された文献目録の中から，比較的まとまっているものを選んで紹介している。戦前のものも若干含まれている。婦人問題全般，婦人参政権問題，女子教育問題，売春問題，年表の8項目にわけて，解説している。

19. 『クリッピングジャーナル女性』創刊1981年10月～月刊 大阪関西婦人労働問題研究会編（㊦P367；K）

朝日，毎日，読売，日経，サンケイ，社会新報，赤旗の7紙より，女性に関する記事の切抜きを，1ヶ月ごとにB5 12頁にまとめて編集したもの。記事が掲載しきれなかったもので主要な事項は，タイトル，紙名，月日を記載している。製本単位巻頭に総目次がある。

なお京都関係の地方記事については，京都市婦人教育情報センター（社会教育総合センター内丸太町七本松）に，京都新聞を含めた新聞の切抜きが整理されている。婦人年の行動計画のテーマ別に分類して保存している。

20. 『ウイメンズブックス』創刊1982年3月～季刊 松香堂書店（京都）（発注中）

女性問題に関する図書・雑誌で，現在入手可能なものを，主題別にリスト化して簡単な紹介を付している。特に一般書店の店頭では目にふれることの少ない，女たちの作るミニコミ誌が毎号紹介されている。

なおこれを刊行している書店は，小さいが全国初のウイメンズストアで，一般書店ではおいていない，地方出版・ミニコミ誌や多少古いものでも，女性に関する図書なら手にとってみる事が出来る。とくに京都にあって利用しやすいので紹介しておく（府庁西隣）。

〔女性史〕

21. 『日本女性史研究文献目録』

女性史総合研究会 脇田晴子ほか編 東京大学出版 1983 P.343（㊦028.367；J）

明治以降1982年までの，女性史的考察がなされている研究書，研究論文を収録。通史，原始・古代，中世，近世，近現代，民俗の6項目に大別し，その中を必要に応じて主題区分している。大項目ごとに，女性史研究の方法，到達点，課題等を主要文献をあげて解説している。文献の位置づけ，評価などを女性史全体の流れのなかで知ることができる。

22. おもな参考文献『この百年の女たち』岡満男 新潮社 1983 P.219～222（㊦367.21；02）所収

近代日本女性史にとって重要な史料である雑誌，新聞を中心に77点。本文には明治・大正・昭和期の婦人雑誌，婦人問題特集号や新聞の婦人欄などの内容が紹介されている。

23. 参考文献『中国女性史』小野和子 平凡社 1978 P.266～272（㊦367.222；O）所収

中国語，日本語，英語の図書と雑誌論文98点を収載。重要な文献に解題を付し，またより詳しい書誌への参照もある。同じく巻末に「中国女性史関係年表 1840～1978」P.273～280がある。各事項が発表された典拠資料，婦人雑誌の発刊が記載されている。

24. 主要参考文献『日本ファシズムと女性』吉見周子 編著 合同出版 1977 P.271～279（㊦367.21；Y5）所収

一般史，女性史，思想関係，教育，記録・伝記，論文・雑誌・新聞，年表・写真・資料集の7項目について，159点が収載されている。

25. 主要参考文献『大正デモクラシーと女性』井手文子，江刺昭子 合同出版 1977 P.306～308（㊦367.21；I3）所収

一般・伝記，近代日本女性史・伝記，年表・年鑑・資料集69点が収載されている。

26. 女性史研究の手引(3)近代日本婦人運動史研究のために一文献案内を中心に一犬丸義一『歴史評論』No.311 1976年3月 P.10～19（㊦P200.1；R4）所収

女性史研究の文献案内を，通史，年表，文献目録，基本史料の復刻版，雑誌論文目録・案内にわけて解説

している。主に戦後の和文図書・雑誌・資料などを紹介し、その位置づけ、評価をおこなっている。

27. 日本における女性史研究の歩み、伊藤康子『歴史評論』No.280 1973年9月 P.20～40 (㊦P200.1; R4) 所収

1)戦前の女性史研究, 2)解放史として出発した女性史研究—占領下の女性史—, 3)研究のひろがり近代女性史の発展—1960年まで—, 4)戦後の研究と地方女性史の発展—1960年代以降—と, 1930年代から1972年を4つの時代に区分して書かれている。各時代ごとに文献を詳細にあげて, その内容を紹介し評価している。日本女性史の研究史として, 研究動向がつかめると同時に, 文献を研究史の中に位置づけてみるができる。

〔婦人運動・解放思想・伝記〕

28. 『婦人思想形成史ノート』上・下 2冊

丸岡秀子 ドメス出版 1975, 1982 (㊦367.21; M6)

上巻は維新から敗戦まで, 下巻は敗戦から, 1981年, 国連婦人の10年後半期にむけての行動計画に至るまでの, 婦人解放思想についての「ノート」である。国会図書館員の協力をえて書きあげられたものだけに, 文献探索は広範なもので, 各章末尾の注は文献目録として, また本文は文献解説として参考になる。

29. 『日本社会・労働運動家伝記目録』

国立国会図書館参考書誌部 1966 P.76 (㊦028.309; K2)

明治30年代から終戦までの時期に活躍した, わが国の社会運動家, 労働運動家の文献を対象として, 1965年までに刊行された和文図書・雑誌論文を採録している。女性では, 市川房枝, 伊藤野枝, 神近市子, 菅野スガ, 高群逸枝, 平塚明子のものがあげられている。

30. 母性保護論争主要文献『資料母性保護論争』香内信子編 ドメス出版 1984 P.321～331 (㊦369.41; S) 所収

1915年から1919年までに, 昌子・らいてう・菊枝・わかちによって展開された母性保護論, および婦人の解放・経済的独立に関する諸論文, 関連文献を含めて広範囲に収録している。主要なものは本文に全文を収録している。

31. 『婦人公論』の40年 帯刀貞代『中央公論70年史』

中央公論社 1955 P.377～459 (㊦023.1; C3-2) 所収

婦人公論40年の歩みをたどって主要論文について紹介している。主要論文目録・解題として参考になる。『青鞥』の創刊がきっかけとなって誕生した『婦人公論』は, 近代女性思想の発展を知る上で重要な手がかりとなる。

32. 年表＝山川菊栄・市川房枝・丸岡秀子・帯刀貞代・同時代史『近代日本女性史への証言』歴史評論編集部 ドメス出版 1979 P.222～251 (㊦367.21; R2) 所収

婦人解放, 婦人運動の先駆者である標題4氏のききとりをもとにまとめた本文の記述を基調に作られた, 1887年から1979年の年表。4氏の著作年譜としても参考になる。

33. 婦人運動史にかんする文献『日本労働運動・社会運動研究史』小山弘健 三月書房 1956 P.174～179 (旧016.31; K) 所収

1899～1956に発表された雑誌論文・図書88点。戦前の文献, 戦後の文献, 景山英子にかんする文献の3つにわけて収録している。目録の前に主要文献をあげて解説している。

34. 参考文献『女性解放の思想と行動』戦前編・戦後編 田中寿美子編 時事通信社 1975 P.324～333, P.314～318 (㊦367.21; T) 所収

明治から現代に至る日本女性の解放思想に関する文献を対象とし(おもに図書)戦前207点, 戦後99点を収録。女大学論からウーマンリブの思想まで, 各時代の中心的なテーマにしたがって分類し, 広範囲に採録している。

35. 参考文献案内『女性解放思想の歩み』水田珠枝 岩波書店 1973 P.207～210 (㊦岩波新書B-90) 所収

女性解放思想の古典, ルネッサンスから革命まで, 19世紀・20世紀, 現代に分類し, 日・英・仏の図書47点を採録。

36. 「青鞥」関係文献『青鞥 元始女性に太陽であった』井手文子 弘文堂 1961 P.201～227 (旧326.8; I2) 所収

1911年から1960年に刊行された図書, 雑誌・新聞に掲載された『青鞥』に関する論文・論説64点をリスト

化したもの。同じく巻末に『青鞥』巻別目次（1巻1号～6巻2号）が掲載されている。『青鞥』復刻版（P. 910.1；S 5）と併せて利用するとよい。

37. 山川菊栄著作目録『山川菊栄の航路』外崎光広，岡部雅子編 ドメス出版 1979 P. 95～222（㊦289.3；Y 33）所収

1914年から1978年の山川菊栄の全著作約1,500点の目録。図書，雑誌論文，新聞記事，座談会記録，翻訳が，刊行年月日順に配列してある。『山川菊栄集』岩波書店（1981～82）（367.2；Y），『山川菊栄解放論集』岩波書店（1984）（367.8；Y－3）と併せて利用するとよい。

38. 女性解放開放関係文献を読む 石井紀子ほか『思想の科学』5次No.118 1971年7月 P. 113～126（㊦P 051；S 21）所収

文学，記録・自伝，家庭・性差別への告発，エロス，女性史，婦人問題，に分類して62点の和文図書を収録している。

39. 女性を中心にした記録関係文献略年譜『思想の科学』6次No.111 1979 P. 63～66（㊦P 051；S 21）所収

1949年から1979年までの，聞き書きによる女性の生活記録をまとめた，和文図書・雑誌記事127点を収録している。

〔婦人と家族・法律〕

40. 『家族問題文献集成－戦後家族問題研究の歩み－』太田武男ほか編 京都大学人文科学研究所 1970 P. 206（㊦028.367；O）

戦後1943年以降1968年夏までの25年間の法律学関係外の家族問題に関する，和文図書・雑誌論文約5,000点を収録したもの。家族史に関する文献と現代家族に関する文献にわけ，それぞれに家族一般，家族関係，風俗・習慣・制度，生活問題，家庭教育，健康管理，外国の家族の7つの章を設けている。

同続編として欧文編がある。1965年から1969年に発表された欧文（アメリカを中心に）の雑誌文献を主として収録している。

41. 『家族法文献集成－戦後家族法学の歩み－』太田武男編 京都大学人文科学研究所 1969 P. 428（㊦028.324；O）

1948年から1967年の日本語およびドイツ語文献。前編邦語文献（第1部単行本，第2部一般文献，第3部判例批評），後編外国文献に大別し，それぞれをさらに家族法一般，親族法，相続法等に細分して収録している。

42. 『内縁問題の葉 判例文献』

太田武男編・刊 1969 P. 84（㊦028.324；N 2）

1898年民法施行当初から1968年に発表された，和文図書・論文約300点を収録している。

〔婦人労働・婦人と社会〕

43. 売春関係参考文献目録『売春対策の現況』売春対策審議会 大蔵省印刷局 1959 P. 507～518（旧326.7；B）所収

1950年から1958年の和文雑誌論文を主として271点を，売春防止関係法規，売春の取締，外国事情，人身売買，各省庁主要目録にわけて収録している。

44. 婦人労働文献目録『合理化と婦人労働者』嶋津千利世編 労働旬報社 1970 422～439（㊦366.35；S－2）所収

1960年から1970年までの婦人労働問題の図書，雑誌論文，婦人労働者の闘争記録，婦人労働に関する資料，国際労働者に関するもの約390点を収録している。

45. 参考文献『婦人労働の理論』嶋津千利世 青木書店 1978 P. 249～252（㊦366.35；S－4）所収

婦人労働者の状態，婦人労働の理論 婦人運動・婦人労働者の歴史，古典を含めて，1894年から1977年までの和文図書95点を収録している。

46. 参考文献『女性労働の経済分析』八代尚宏 日本経済新聞社 1983 P. 217～220（㊦366.35；Y 3）所収

女性労働問題一般，女性労働供給分析，女性労働需要と日本の雇用慣行，失業にわけて44点の図書，雑誌論文を収録している。

47. 資料参考文献『家庭と社会』一番ヶ瀬康子 小山隆編 亜紀書房 1970 P. 387～389（㊦367；G）所収

現代の家庭，主婦の生活，現代の家庭問題，官庁統計・調査報告の4項にわけて49点を収録している。

48. 戦後に刊行された女性の地位に関する図書目録
『現代日本の女性』小山隆編 国土社 1962 P.366
～382 (旧326.9; K2) 所収

1947年から1962年まで、戦後に刊行された、女性の地位に関する図書371点、労働省婦人少年局刊行資料280点を収録している。

49. 基本文献案内女性と法関係文献 橋本ヒロ子・馬場浩子『法学セミナー増刊総合特集シリーズ』No.25, No.30 日本評論社 1984年2月, 1985年7月(叢P320.1; H76) 所収

男女平等の視点による図書、雑誌記事・論文を中心に、基本文献の内容が紹介してある。

No.25は1983年上半期までに刊行されたもの134点, No.30は1983年下半期から1985年3月までに刊行されたもの69点を収録している。

50. 婦人労働文献目録 丘章子・三宅喜代子『賃金と社会保障』No.673, No.712 労働旬報社 1975年5月, 1976年12月(叢P.366; C4) 所収

1974年1月から1976年9月に公表された、図書、雑誌論文約300点。労働問題、社会保障、労働運動を主題に編集した広範囲の雑誌から採録している。この時期は婦人年にちなんで婦人労働問題関係の論文、雑誌特集も沢山出ているので参考になる。

なお, No.701-2合併号(1976年7月)には、「賃金と社会保障事項別・著者別総索引」(創刊～700号)がある。

〔年表・年鑑ほか〕

51. 『婦人問題辞典』
婦人問題辞典刊行委員会 学習の友社 1980 P.313
(叢367; F4)

婦人の生活にかかわる用語1,200語を、分野別に収録、解説している。解説1,000字以上の項目には参考文献が紹介してある。50音順の索引もある。

52. 『婦人年鑑』昭和13年版, 昭和14年版
村上秀子編 東京連合婦人会 1937, 1938(旧R326; H13)

13年版には「現代女性史年表」1868～1937(P.241～250) 14年版には「昭和13年度婦人著書目録」「婦人家庭雑誌新聞一覧」(P.161～165)がある。民間側が作成した資料の少ない、戦時体制下の婦人の状況を知ることが出来る。

53. 『現代婦人運動年表』
三井礼子編 三一書房 1974年改訂版 P.260 (叢367.21; M)

1868年から1959年の婦人運動を中心にした年表であるが、婦人問題全般の参考になる。偶数ページに年表、奇数ページで重要項目の解説をして、小辞典を兼ねている。また各年の最後に、その年の主要な婦人問題書刊行にふれているので、文献目録としても利用できる。

54. 『近代日本婦人問題年表』(日本婦人問題資料集成第10巻)丸岡秀子, 山口美代子 ドメス出版 1980 P.500 (叢367.21; N7)

1868年から1975年までの日本婦人の生活や実践、運動を総合的にとらえている。地方の事例まで丹念にとらえ、各事項の出典を明記し、巻末に典拠文献一覧820点をあげている。

なお『日本婦人問題資料集成』全10巻を構成する1巻として出版されたもので、各巻に採録された事項・人名をも収録し、それぞれの巻の主題に関連しているので併せて利用するとよい。

55. 『京都の婦人のあゆみ』(年表)
京都婦人のあゆみ研究会編刊 1976 P.264 (叢367.8; K8)

1945年から1975年まで、戦後30年間の京都の婦人たちの、女性解放をめざす様々な運動や活動の歴史を記録している。年表の各事項に出典を明記し、巻末に典拠文献を、戦後史・女性史・婦人問題一般、年表、新聞、京都の一般情勢にわけて、参考文献として列挙している。これからの課題である、地域女性史の発掘に参考になる。

56. 『近代婦人雑誌目次総覧』全15巻
近代女性文化史研究会編 大空社 1985～ (叢027.5; K22)

明治期から1945年までに発刊された、婦人関係の雑誌のうち、各時代の特色を反映し、かつ現在においても意義・役割のあるものを選んで、その創刊から終刊までの全目次を収録している。戦後復刻をみたものと閲覧しやすい婦人の友、婦人公論、主婦の友は除外している。各雑誌ごとに掲載事項の内容や位置づけを解題し、巻末には著者名索引、所蔵一覧がある。現在5巻まで刊行されている。

実例を中心とした

資料のさがし方—28—

「政府刊行物」とは、文字通りに読めば政府諸機関が発行する刊行物ですが、広義には政府諸機関が編集、監修したものを、半官、半民の団体あるいは民間出版社が発行するものを含める考え方もあり、どこで線を引くかは困難なようです。

今回は、このような刊行物のさがし方、利用法について、若干紹介いたします。

〔質問例 1〕

「白書」にはどんなものがありますか。

〔調査〕

「日本の白書（昭和60年）」〔317；N 2〕を見ると次の35種類があり、それぞれを要約したものが収録されている。但し、「日本の白書」は政府が年度中に公表した白書を収めたもので、民間諸団体が発行する「白書」を書名中に持つものは収録されていない。

白書名（機関名）	〔請求記号〕
「観光白書」（総理府）	〔688.21；K 2〕
「交通安全白書」（総理府）	〔681.3；K〕
「行政管理白書」（総務庁）〔317.2；G 3〕	「行政管理の現況」
「青少年白書」（総務庁）	〔369.4；S 2〕
「警察白書」（警察庁）	〔317.7；K 3〕
「防衛白書」（防衛庁）〔392.1；B〕	「日本の防衛」→〔392.1；N 3〕
「経済白書」（経済企画庁）	〔332.81；K 2〕
「世界経済白書」（経済企画庁）	〔332.8；S〕
「国民生活白書」（経済企画庁）	〔365.5；K〕
「科学技術白書」（科学技術庁）	〔502.1；K〕
「原子力白書」（原子力委員会）	〔539.091；G〕
「原子力安全白書」（原子力安全委員会）	〔539.9；G〕
「環境白書」（環境庁）	〔519.5；K20〕
「国土利用白書」（国土庁）	〔333.91；K 9〕
「防災白書」（国土庁）	〔317；B 2〕
「過疎白書」（国土庁）〔611.921；K5〕	「過疎対策の現況」
「独占禁止白書」（公正取引委員会）〔335.57；K〕	「公正取引委員会年次報告」
「犯罪白書」（法務省）	〔326.3；H〕
「外交青書」（外務省）〔319.21；W〕	「わが外交の近況」
「厚生白書」（厚生省）	〔498.1；K〕
「農業白書」（農林水産省）〔612.1；Z 2〕	「図説農業白

書

「林業白書」（林野庁）〔650.21；Z 2〕「図説林業白書」
「漁業白書」（水産庁）〔660.21；Z 2〕「図説漁業白書」
「通商白書」（通商産業省）〔678.21；T 2〕
「中小企業白書」（中小企業庁）〔335.35；C〕
「運輸白書」（運輸省）〔682.1；U〕
「海運白書」（運輸省）「日本海運の現況」
「海上保安白書」（海上保安庁）〔317.77；K〕
「通信白書」（郵政省）〔692.1；T 3〕
「労働白書」（労働省）〔366.021；R〕
「婦人労働白書」（労働省）〔366.35；F〕「婦人労働の実情」
「建設白書」（建設省）〔510.9；K 2〕
「地方財政白書」（自治省）〔349.21；C〕
「消防白書」（消防庁）〔317.79；S 2〕
「公務員白書」（人事院）〔317.3；K 3〕

いずれも、参考図書室に配架、バックナンバーは閉架書庫。

〔質問例 2〕

今国会（第102回）でシート・ベルト着用義務等について改正された「道路交通法」を見たい。

〔調査〕

各種六法全書、「現行法規総覧」にはまだ収録されていない。何日に成立したかを新聞で調査してみる。

「朝日新聞」縮刷版の記事索引で「国会」の項をさがしてゆくと、6月号に「シート・ベルトの義務付け法成立（道交法改正）」とあり、本文で19日参院本会議で可決、成立したことが分る。法文そのものは載っていないが、改正点については簡単な説明がある。

公布は30日以内、「官報」を調査する。

目次を順次さがして行くと、7月5日号に「道路交通法の一部を改正する法律」とあり、3ページにわたって改正条文を収録している。

〔解説〕

「官報」は、法律・条約・告示・予算・辞令等の公示事項を国民に知らせる日刊の政府機関紙で、明治16年に発刊されたものです。従って、最近に成立した法律等の内容について調べる時にも便利です。

例えば、同じ7月の1日号に今国会で承認された「女

子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の
日本文全文が掲載されています。これは、条約集等を見
ますと、日本が未批准・未発効であったためか、英文や
日本語抄訳しか収録されていませんでした。

又、各種白書についても「官報」資料版（官報付録、
週刊）にそのあらましが掲載されます。

「官報」は当月分と前月分を、資料版は当年度分をフ
ァイルして参考図書室に備えています。

「官報」の創刊から昭和20年12月までの目次をまとめ
た「官報目次総覧」〔P317；K-2〕が、最近出版されま
したのでこれも御利用ください。

〔質問例 3〕

1984年、厚生省の専門家会議が、焼却炉のダイオキシ
ン汚染の安全性について報告書を出したそうだが、その
全文を見たい。

〔調 査〕

報告書名が分らないので、新聞記事を当てる。

「朝日新聞」縮刷版の記事索引の“公害”の項を順次
さがしていくと5月号に“焼却炉のダイオキシン汚染、
現状では人体無害、専門家会議「安全宣言」”とあり、本
文を見ると5月23日に厚生省に提出したことが分る。

念のため「官報」をさがしてみたがでてこない。

「月刊ニュー・ポリシー」の年間索引の厚生省の項を見
ると、“廃棄物処理に係るダイオキシン等の問題について
……廃棄物処理に係るダイオキシン等専門家会議”とあ
り、本文の方の日付は5月で、内容は焼却炉のダイオキ
シン汚染について述べられている。

〔解 説〕

「月刊ニュー・ポリシー」—政策情報資料集—は、各
省庁や、審議会、委員会、調査会の報告、答申等の資料
を収録した月刊の資料誌です。創刊は昭和56年の4月と
新しいのですが、政府資料そのものが収められています
ので大変便利な刊行物です。

他に今年創刊されたものに「経済政策情報」—Today &
Tomorrow—というのがあります。これは加除式の月
刊誌で、各省庁で公表された経済・産業に関する政策資
料の抄録を収めたものです。内容はマクロ経済、財政・
金融、産業社会、イノベーション、通商・国際情報、国
土・地域経済、住宅・都市開発、国民生活等に分れてい
ます。尚、原資料を必要とするときは、出版社にコピー
を注文できます。

〔質問例 4〕

文部省大学局大学課編「昭和54年度大学入学選抜実
態調査」をさがしている。

〔調 査〕

著者・書名目録（カード）なし。

「ニュー・ポリシー」になし。

「統計情報索引」を検索する。昭和56年版の編集機関
別報告書名索引で文部省の項にあり。文部省大学局大学
課より提出されていることが確認でき、調査項目も分る。
国会図書館蔵書目録はこの年代がないので、「日本全国書
誌」とその週刊版索引をさがしてみたがでてこない。

「官庁資料要覧」'81を当ると、文部省の項にあり。こ
の要覧の出版元政府資料等普及調査会にコピー・サービ
スを依頼する。

〔解 説〕

政府刊行物は発行の形態が民間出版物と異っています
ので、その入手方法や利用方法が困難な状態です。従っ
て、目的のものが、どのような形で発行され、どこにあ
るか、又、利用が可能かを知る必要がでてきます。

次に、政府刊行物を収めた目録類を紹介します。

国会図書館蔵書目録と共に御利用ください。

「官庁刊行図書目録」〔027.2；N〕

昭和2年～12年。

以後「官庁刊行図書月報」昭和13～18年と改題。

「官庁刊行物総合目録」〔013.91；K2-2〕

昭和20～33年分を収録。全8巻（但し、図書館は8
巻が欠巻）。

「全日本出版物総目録」〔025.1；K2-4〕

昭和23～51年版、この内34～35年版のみ官公庁編が
独立している。

「日本全国書誌」〔0251.1；K2-5〕

昭和52年版。官公庁出版、民間出版、索引に分冊。

「全日本出版物総目録」を継承するもの。

週刊版〔025.1；N7〕は昭和56年から発行されてい
る。昭和53～55年は「納本週報」〔025.1；N6-2〕で
補なえる。

「政府刊行物月報」

「政府刊行物目録」昭和32年～の改題

「官庁資料要覧」〔027.2；S3〕

隔年版。販売されていない政府刊行物を中心に収録。

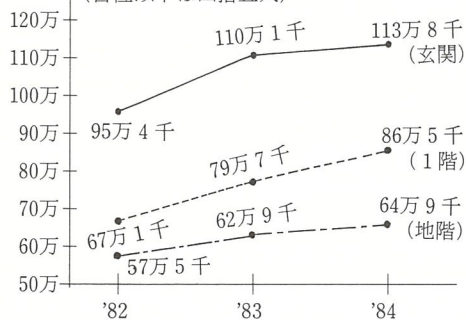
「政府刊行物等総合目録」

年刊。販売目録。

図書館利用状況推移—最近3年間の利用統計より—

表1. 入館(室)者数

(百位以下は四捨五入)



	'82	'83	'84
玄関	271	272	270
1階	254	266	262
地階	271	240	237

表2. 館外貸出冊数

() 内は閉架図書

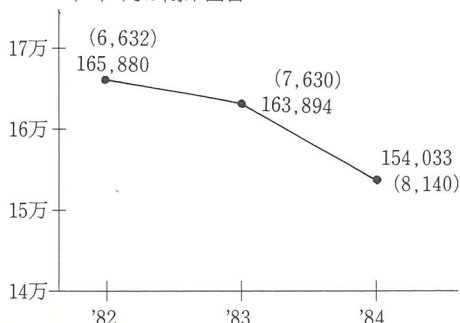


表3. 開架図書館外貸出冊数分類別Best10

分 類	'84年度		'83年度		'82年度	
	順位	冊数	順位	冊数	順位	冊数
320 法律	1	14,875	1	17,666	1	18,377
540 電気	2	12,194	2	12,274	2	11,845
330 経済	3	10,355	3	10,481	3	11,635
910 日本文学	4	7,663	4	8,213	4	7,505
430 化学	5	6,782	5	7,671	7	6,968
930 英米文学	6	6,656	8	6,767	6	7,050
360 社会学	7	6,410	6	7,111	5	7,295
410 数学	8	6,066	7	6,959	8	5,992
530 機械工学	9	5,360	9	5,844	9	5,041
420 物理学	10	4,044	10	5,135	10	4,786
経済学部文庫	付1	8,438	付1	8,119	付1	8,134
新書・文庫	付2	6,140	付2	5,715	付2	5,639

注: 新書・文庫=中公新書・岩波新書・岩波文庫

☆入館(室)者数(表1)

'81年度以前の入館者数は、1階と地階をあわせた入室者総数としていたが、'82年度からは玄関入口にも光電管式計数器を取付けたため、実質的な入館者数が分るようになった。入室者総数に比べ入館者数は約23~5%少ないので、同一利用者による1階と地階の利用が相当あるものと推測される。

ところで、'82年度には「ブック・ディテクション・システム(B. D. S.)」の導入「土曜日午後の開館」(以前は1F閲覧室・読書室のみ)という大きな変革があった。その為、1階と地階の利用動態はそれまでとは全く逆転し、1階入室者数が地階入室者数を上回るようになった。即ち、'81年度入室者数は1階(開架閲覧室)延56万8千人・地階(閲覧室・読書室)延67万8千人であったのが、'82年度にはその数をほぼそのまま交換、逆転した形になった。

また、'83年度からは玄関受付係の廃止によって、身分証明書のチェックがなくなり、出入り自由となったためであろうか、入館者数がさらに増えている。それに伴って、学外者の無断入館も多くなっているように思われるが、1階入室者数については、'80年度(学年末試験全科目レポート)の71万4千人の記録を軽く上回るのが常態となっている。

さらに、'83年5月9日より、従来10時であった1・2階開室時間を午前9時からに改めることになった。このことも利用を高める大きな要因として挙げることができよう。

一方、地階入室者数は'84年度になっても、B. D. S. 導入以前の水準(67万~70万人弱)に至っていない。

☆館外貸出冊数(表2)

'82・'83年度は'81年度に比し、1割近くの間外貸出冊数の増加となり、'80年度(学年末試験全科目レポート)の17万冊弱には及ばぬものの、16万冊をはるかに超える貸出数であった。

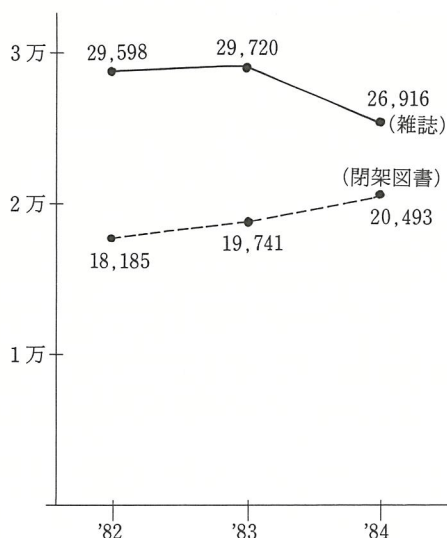
しかし、'84年度には貸出条件を大幅に変更、特に利用の殆どを占める学部学生の貸出期間を、従来の1週間から2週間に延長したため、館外貸出冊数は対前年度比6%(約1万冊)減少した。少なくともしたのは開架図書の貸出冊数であり、表2の()内に内訳として示した閉架図書の館外貸出については着実に増加している。

開架図書館外貸出冊数の分類別内訳は、表3によってその概要を特徴的に把握することができる。表3に掲載の分類別Best10の合計冊

表4. 開架・館分類図書出納冊数分類別Best10

分 類	'84年度		'83年度		'82年度	
	順位	冊数	順位	冊数	順位	冊数
210 日本史	1	2,472	2	2,436	2	1,643
910 日本文学	2	2,232	1	2,489	1	2,090
320 法律	3	1,769	3	1,158	3	1,376
280 伝記	4	929	4	894	5	785
350 統計	5	909	7	430	4	993
330 経済	6	724	5	817	6	628
310 政治	7	543	6	464	8	448
370 教育	8	539	13	325	14	269
200 歴史	9	492	9	399	15	260
720 絵画・書道	10	455	8	413	19	206
380 民俗学	15	334	9	399	10	307
120 東洋思想	17	302	12	376	9	441
※670 商業	26	113	18	235	7	457

表 5. 出納冊数
(開架請求冊数)



数は、毎年度、館外貸出総冊数の約 5 割を占めている。

ちなみに、開架蔵書冊数は、'85年 3 月現在 63,927 冊(新分類 53,604 冊、学部文庫 6,786 冊、新書・文庫 3,537 冊)である。また、開架図書回転率(貸出冊数/蔵書冊数)は'82年度 2.7、'83年度 2.6、'84年度 2.3 となっている。

☆開架図書出納冊数 (表 5)

開架図書の利用は着実に伸びている('82年度は対前年度比 30% 増)。増加分のほとんどは新分類図書であるが、旧分類図書(昭和 39 年 3 月までの整理分)の利用は漸減して、'84年度には初めて'76年度以来の 3,000 冊台を割り込むことになった。

なお、表 4 に掲げた新分類別 Best10 の合計冊数の、開架図書出納総冊数に占める割合は、'82年度の約 50% から'84年度の約 53% へと漸増している。しかし利用が減っているものもあり、特に 670 に分類される「商業」の利用は、ここ数年急減している。

☆雑誌出納冊数 (表 5)

'82年度は対前年度比 24% もの利用増となっていた。しかし、'83年度はほぼ横這い、'84年度には下落している。これは、最も利用の多い雑誌を一部開架(雑誌・参考図書室)に配架しなおした影響も一因している。即ち、'83年 10 月半ばより「世界週報」('82年以降のバックナンバー)を、'84年 3 月より「朝日新聞」・「日本経済新聞」('82年以降のバックナンバー)を、また、その後「京都新聞」をも自由閲覧に供したためと思われる。その他、'84年度は、E. S. S. (クラブ) のメンバーによる利用が、例年と異なり非常に少なかった事も減少の一要因であろうか。

なお、現在受入継続中の雑誌は約 1,400 タイトルであり、その内約 420 タイトルの新刊誌を、雑誌・参考図書室の新刊展示コーナーに展示しているので、その利用動向については、統計数字には計上されていない。

☆文献複写枚数 (表 6)

'82年度は対前年度比 10% 増加して、40 万枚台に初めて乗った。'84年度には 50 万枚を目前にするまでに至っており、コイン式になった'78年度と比べると、およそ 3 倍の数字となっている。

また、'82年度には新型のマイクロ・リーダー・プリンターを購入・設置した。設置場所も、奥まったマイクロ・リーダー室に置かず、メイン・カウンター前にオープンに設置した事などから、翌'83年度あたりから利用も目立って増えて来た。マイクロ資料の性質から、院生・教職員による利用が中心であるが、このところやっと学部学生による利用も時々見られるようになった。

表 6. 文献複写枚数

	'82	'83	'84
コイン方式	393,732	414,627	472,317
複写受付	10,443	10,355	13,957
マイクロ複写	未統計	442	425
計	404,175	425,424	486,699

注：複写受付には郵送によるもの(表 12 参照)をも含む

表 7. 昭和 59 年度 レファレンス・サービス

		調 査 法	書誌確認	所在調査	事項調査	合 計
学 生		617(R) 607(M)	47(R) 44(M)	248(R) 113(M)	99(R) 77(M)	1,852
教職員		36	9	81	28	154
学 外 者	来 館	11	2	16	5	34
	電 話	3	10	107	9	129
	文 書	1	0	85	10	96
合 計		1,275	112	650	228	2,265

※「調査法」とはカード目録の利用のしかた等、図書館の利用案内をいう

※(R)はレファレンス・カウンターで受付た件数

(M)はメイン・カウンターで受付た件数

表8. AV室・オーディオ室利用者数

	'82	'83	'84
A V 室	2,962	4,091	4,166
オーディオ室	2,242	1,431	1,489
合 計	5,204	5,522	5,655
開 室 日 数	157日	159日	160日

注：開講中の月～金曜日午後約3時間開室

表9. 教職員・院生の書庫への入庫者数

	'82	'83	'84
人 員	1,905	1,951	2,393

表10. 特別閲覧証（券）の発行

	'82	'83	'84
閲 覧 証	230件	192件	165件
閲 覧 券	33件	31件	36件

注：閲覧証（年度内有効）

閲覧券（1ヶ月有効）

対象は学外者（主として卒業生）

表11. 他館への利用者紹介状発行
他館からの利用者紹介状受付

	'82	'83	'84
発 行 件 数	336	344	272
受 付 件 数	124	156	154

注：発行件数には同志社女子大学図書館への紹介は含まず。

表12. 他館への文献複写依頼
他館からの文献複写受付

	'82	'83	'84
依 頼	件数	383	392
	枚数	未統計	4,981
受 付	件数	765	639
	枚数	未統計	7,532

注：ここでは郵送によるものに限る。

件数は1論文1件。

表13. 他館への図書貸出
他館からの図書借受（仲介）

	'82	'83	'84
貸 出 冊 数	未統計	0	1
借 受 冊 数	未統計	14	20

☆レファレンス・サービス（表7）

'83年11月よりレファレンス体制充実のため、さまざまな方法が試みられてきた。組織的には、レファレンス担当係1名を中心にレファレンス委員会の設置や、レファレンス・カウンターでの相談時間の拡大、及びレファレンス・カウンターを雑誌・参考図書室から目録コーナー側に移設し、より機能的な配置にするなどがそれである。そうした努力と、統計のとり方の変更とがあいまって'84年度には飛躍的な相談受付件数となった。従来の質問件数統計は、調査に時間を要するもののみ集計したものであり、およそ100件（'82年84件、'83年93件）にもみえない受付件数であったが、'84年度より、メイン・カウンターでの助言、援助したものも含め集計すると、別表の通りとなった。

☆AV室・オーディオ室利用者数（表8）

'81年度以来利用者数は毎年3千人台であったが、増える傾向にある。また、AV室の機能（オーディオ・スライド）を利用した授業も近年増える傾向にあり、その意味では、AV室の多面的利用が促されてきたと言えるであろう。

また、第1～4オーディオ室の利用は、カセット・テープ（ほとんど音楽）の「貸出」によるものと、テープ、及びレコードの「持込」によるものとに分けられるが、「貸出」は「持込」の約2～3.3倍になっており、相変らず一時期購入したニュー・ミュージックに集中している。「持込」による利用者数はこの3年間大きな差異がなく、年平均およそ500人となっている。

☆教職員・院生の書庫への入庫者数（表9）

この数年、書庫（閉架）への入庫者数は多くなってきた。特に'84年度は対前年度比23%も急増しており、1日平均では約22人になる。また、'76年度の716人に比べると約3.3倍にもなったことになるが、これは教職員以外院生については、博士課程（後期）のみ入庫可としていたものを、博士課程（前期）をも入庫資格者としたことによる。

なお、開講中毎月1回定期的に催される書庫見学による入庫者は、当然ここには含まれていない。

☆特別閲覧証（券）の発行（表10）

閲覧証の発行は'83年度以降減少している。この原因は'83年度より玄関受付係が廃止され、入館に際し閲覧証を提示する必要がなくなったことがあげられる。

一方、閲覧券については、臨時的短期利用のものであり、毎年発行件数も少なく、増減も少ない。

ちなみに'76年度の閲覧証の発行は132件であったので、'82年度は異常に増えたことになる。その年、閲覧券の発行は48件であった。

☆他大学図書館との相互利用（表11～13）

この3年間の累計によると、他館への利用紹介状の発行は、他館からの紹介状受付の約2倍になっている。京都大学への紹介状発行が約9割程度を占めているのが、特徴である。

一方、相互利用の中心を占める文献複写については、他館からの郵送による受付件数が、他館への郵送による依頼件数の約2倍になっている。

図書の相互貸借については、大学図書館間では、「関西四大学（関・関・同・立）図書館相互利用協定」に基づくものがある以外は、制度化されていない。したがって、借受のほぼ総ては公共図書館からのものであり、わけでも国立国会図書館からの借用が大部分を占めている。極く稀には外国からの借受もあった。

この3年間を概括すると、少なくとも統計上は、図書館の利用が一段と活発になった様子が伺える。利用時間の拡大や、B. D. S. 導入によって、煩わしくない気軽な図書館利用が促されたことなど、強いて挙げればその要因と言えるのであろうか。

今回は本図書館のケーリ文庫から、ティチングの『Illustrations of Japan』(R. Ackermann, 1822年刊 請求記号F210.1; T14)を紹介しましょう。

ティチング(Titsingh, Isaac 1744-1812)はケンペル、ツンベルグ、シーボルト等と並び、江戸時代の鎖国政策下に長崎に在留した著名な日本研究家の一人です。彼はオランダのアムステルダム外科医を多く輩出した家系に生まれ、早くから医学を学びますが、1766年一転してオランダ東インド会社に入社してしまいます。その後、1779年8月15日には長崎出島商館長として初来日

し、翌1780年、
商館長在職中

の最大任務である江戸参府の途に就き、同年4月5日、將軍家治に謁見しています。

ティチングは3回の来日で、延べ3年8ヶ月の短い期間日本に滞在はしていましたが、その間に当時悪化していた日蘭貿易の再興に貢献し、また一方では多くの日本人との交際を深め、日本人の生活慣習に関する研究資料を多数収集しました。この交際は、彼が日本を去りベンガル、パタビアに在ったときまで、朽木昌綱、中山淳庵等と書翰により継続されていたようです。

33年間の東洋在勤を終えたティチングは、オランダへ帰国後パリへ移住します。そして資料の翻訳、原稿の執筆に専念しますが、1812年2月9日病歿してしまいます。残念なことは、彼の日本に関する研究が漢字印刷の問題や社会的混乱などにより、生前に殆んど何も出版の運びに至らなかったことです。

本書の内容は2部に分かれ、第1部は1820年パリ刊行の『Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des djogouns』(邦訳：歴代將軍譜)を、第2部は1819年パリ刊行の『Cérémonies usitées au Japon pour les

mariages et les funérailles』(邦訳：日本における婚礼と葬式)を英訳したもの(訳者：Shobenl, Frederic)です。

第1部は徳川將軍家歴代の事蹟を主体とし、幕府の年中行事、法定自殺法(切腹)、作詩法、度量衡、曆法等に関する記事を収めています。第2部は内容が更に2部に分かれ、まず婚礼の部分は、本文中にも記されていますが『嫁取重宝記』と『当世民用婚礼仕用罌粟袋』を典拠としています。特に後者については、場所によっては説明を付加したり、煩瑣な点を省略したりしているものの、農民・職人・商人の婚礼が大体忠実に

に翻訳されて
います。一万、
葬式の部分は

婚礼の部分とは異なり、単なる翻訳ではなく、ティチング自身が長崎で観察し見聞した知識が含まれています。中でも、日本人が死体の硬直を防ぐために用いた「土砂」に関する記述は興味深いもので、科学的分析を試みるティチングの近代人らしい面影が浮んできます。

上述のように、本書では日本の歴史に関する挿話的文章、或いは風俗慣習や民俗に関する記事が豊富で、しかも詳細に記載されています。また、自己の見聞や観察のほかには自分が入手した日本の文献をそのまま翻訳し、更に挿絵を忠実に模写・複製して収録していることも、同類の日本研究書とは異なる注目すべき大きな特色です。

本図書館では、ここに紹介した英訳本のほかに、『新異国叢書』(雄松堂書店刊、請求記号210.5; S4)所収の邦訳書「日本風俗図誌」(訳者：沼田次郎 1970年刊)を所蔵しています。

参考文献：上記邦訳書解説、世界名著大事典 5
(平凡社刊)ほか

“びぶりおてか”

同志社大学図書館報 No.38 1985年10月15日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 251-3971

編集責任者 西田逸郎 (図書館庶務課長) 印刷正文堂